

第 1 回 双葉町復興まちづくり委員会 生活再建部会 議事概要

■日 時 : 平成 24 年 11 月 12 日 (月) 午後 3 時 05 分～午後 4 時 30 分

■場 所 : 双葉町役場埼玉支所 4 階家庭科室

■出席者 : 別紙座席表のとおり

■議事概要

1. 開会

2. 部会長並びに副部会長の選任について

部会長に高野重紘委員、副部会長に渡邊ゆかり委員を選任。

3. 議事

(1) 「仮の町」の形態について

資料 2、3、4、5 について事務局より説明後、質疑。委員の主な意見は、以下のとおり。

○仮の町を考えた場合、相手のあることでもあるため、どうしても分散型になってしまうのではないかと。避難先では既に就職し、住む場所を決め、子供たちも学校に通っている現状では、1 か所に集中した場所に町民が果たして移ることができるだろうか。

○町に帰れない現実を前に、仮の町の議論はある面では意味がなく、賠償問題が解決すれば、町民一人ひとりが各々の避難先にとけ込み、新しい生活を築いていくということになるのではないかと。その中で、双葉町の存在を維持するためには、町単独ではなく双葉郡全体で取り組んでいくこともあり得るのではないかと。

○仮の町については、学校の立場では集中型が望ましい。将来の双葉町を担う子供たちのため、また、町の伝統文化の伝承のため、集中型でどこかに拠点を置き、たとえ通う生徒は少なくとも、まずは学校としてスタートすることが重要。そうしないと町はなくなってしまうのではないかと。また、学校については、仮の町とは別に、一刻も早く再開する必要がある。

○商工会の立場からは、集中型の方がいいと思う。これまでの商売も双葉町、双葉郡だから成り立っていたという面はある。集中型にする場合、福島県内に広い土地があるので、そこに双葉町等の帰還困難な地域が集まってコミュニティを作り、新双葉町として町づくりを行えば、商売も学校もできるのではないかと。

○仮の町という言葉自体に弊害があるのではないかと。仮の町ということは必ず無くなるわけだから、受け入れる自治体も認めないだろう。

- 仮の町の在り方としては、現実的な問題として、集中型を目指しても全ての町民が集まることはできないため、分散型であるべきだと思う。現在、つくばの公務員宿舎に住んでおりそこで骨を埋めるつもりだが、周りは空き家も多く、多くの町民を受け入れる余地はあるため、新町・双葉として町づくりを検討してもよいのではないか。
- 避難先では地元には迷惑はかけられない。つくばでは環境を整備して地元の人たちから感謝されるようになっている。
- 子供を持つ母親として子供の被曝の問題が一番重要。関東全域も大なり小なり汚染されているが、福島は日常生活上注意しなければならないことが多すぎて、県外に留まっている。仮の町を考えた場合、ある程度本拠地を1か所に決めて、役場、学校、病院等の町の機能を設ける必要がある一方で、そこに移ることができない町民に対しても各々の地域で拠点として認め、面倒をみる必要はあるのではないか。
- 仮の町について集中型を目指して多くのまとまった人数が移り住む場合には、受入れ先との関係や土地の確保など課題も多いため、集中型と分散型の中間あたりになってしまうのではないか。
- 子供たちも事故から1年以上経ち、それぞれの地域で馴染んでいるのであれば、進学等今後の色々なことを考えても今の場所で生活を続けたほうが良いと思う。他方、学校の再開の条件については、子供たちが集まるか否かで判断するのではなく、たとえ少人数であっても学校を必要とする子供がいるのであれば、再開することも大切ではないか。仮の町を考えた場合でも、これだけ町民が全国に散らばり、それぞれ自立しようとしている中では、どこかにまとまって集まることは難しく、分散型にならざるをえないと思う。子供たちの将来のためにも、将来的に町の拠点となり得る場所に、仮の町とは別にまずは学校を再開することが必要ではないかと思う。
- 避難時期が長くなれば、それぞれの避難先に生活基盤ができてくる。仮の町に関して集中型はイメージとしては良いが、放射能への不安など諸々の制約条件を考えれば、分散型でそれぞれの地域で生活するほうがよいのではないか。
- 今後議論を重ねていく上で、色々な条件が重なり調整を行いながらどこかの時点で妥協点を見出す時期が来るかもしれないが、今の段階ではあきらめた議論をするのではなく、町民それぞれの本音の想いや要望を訴えていくことも重要だと思う。
- 今後仮の町の議論をしていく中で、どこかの地域にまとめる妥協点を見出す場合においても、仕事の関係等各々の事情でどうしても移り住むことができない

町民に対して、町としてどのような支援をすべきかについて議論していく必要がある。

- 母親の立場から、子供は小さい子ほど学校に馴染むのが早く、子供たち自身ももう転校したくない、今の学校にずっといたいという話をよく聞く。そのような中で、仮の町についても、どこか1か所に町があってもよいが、各地にいくつかの分散した小さな拠点を設けてもよいのではないかと思う。
- 仮の町を議論する際に、今の生活を如何に良くするかということに加えて、将来的に戻る場所についても自分が住んでいた土地ではなく、双葉郡の地域のどこかに戻るというような視点も必要かと思う。また、将来的にもぬけの殻になるような町を作るのではなく、長く住むことができ人が住みたいと思えるような魅力的な町づくりを目指していく必要がある。
- 仮の町ではなく、新生・双葉町として、福島県でなくてもよいから放射能がなく温暖な場所に拠点をもち、何十年先を見据えた、将来を考えられる新たな町づくりを作っていくことも必要ではないか。
- 原発事故以来、家族みんながバラバラになり、多くの人々が厳しい避難生活を強いられている現状がある。仮の町を議論する上でも、そうした人たちの生活を少しでも事故前の生活に近づけられるような、希望の持てる町づくりを目指していくことが重要だと思う。
- 戦後、わが国では開墾制度の下で至る所で開発が行われたが、限界集落を生み出してしまったという現実もある。仮の町を議論する際、分散型になっていくのもよいが、そういった視点も必要である。

(2) その他

4. その他

5. 閉会

第1回生活再建部会座席表

(敬称略)

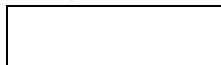
1 日時 平成24年11月12日(月)

14:45~16:30

2 場所 双葉町埼玉支所 4階家庭科室

副
部
会
長

部
会
長



高野 重紘
吉田 岑子
井上 六郎
荒木 幸子
大久保 敏己
高野 憲一
竹本 良一

三井所 清典	駒田
藤田 博司	事務局 吉野
	松橋
中村 希雄	
鵜沼 友恵	事務局
渡邊 ゆかり	
井上 一芳	
山下 正夫	